

ノースウェスタン大学人類学部の考古学野外実習

植 崎 修一郎

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 はじめに | 5 アメリカ中西部の編年 |
| 2 アメリカ考古学センター | 6 エリザベス・マウンド群 |
| 3 コースについて | 7 現地見学 |
| 4 骨学実習 | 8 その後のフィールド・スクール |

—— 要 旨 ——

アメリカの人類学は、考古学・自然人類学・文化人類学・言語人類学の4つの分野を含む。アメリカの大学には、369の人類学部があるが、夏期には、夏期考古学野外実習を開講している。ここでは、筆者が1985年に受講した、第18回ノースウェスタン大学考古学野外実習の様子を紹介する。ノースウェスタン大学は、イリノイ州シカゴ郊外のエヴァンストンに位置するが、野外実習はイリノイ州の南にあるキャンパスヴィルにあるアメリカ考古学センターで実施された。センターは、人口400人の村の39の建物を買い取り、様々な分野の研究室に変貌させた。コースは、大学生のみならず小中高生や成人用にもプログラムが組まれており、1985年時点ですでに約15,000人以上が参加している。このプログラムは、1960年代にアメリカで有名になったコスター遺跡と共に拡張されており、その中心的人物は、ニュー・アーケオロジの先駆者であるステュアート・ストリューヴァー博士である。その後、このコースは生物考古学を専攻するジェーン・バイクストラ博士が中心となって開催されている。1985年のコースでは、中期ウッドランド期のエリザベス・マウンドの発掘調査を通して実習が行われた。この調査では、人骨9体・土器5個・イヌの骨等が発見された。また、夜には、バイクストラ博士による優れた骨学実習も開講され、それまで人骨を見たことも触ったことも無かった学生が、数週間後には人骨の同定ができるようになる様子も紹介する。合わせて、現地見学が行われた中でも、イリノイ州を代表するイリノイ州立博物館・ディクソンマウンド博物館・カホキアマウンドを紹介する。その後のフィールド・スクールは、バイクストラ教授の移籍に伴い、ノースウェスタン大学からシカゴ大学へ、そして現在はニュー・メキシコ大学へと変更されている。但し、フィールド・スクールは一貫してアメリカ考古学センターで行われており、2002年には第35回フィールド・スクールが開催される予定である。

キーワード

対象時代 アーケイック期～ミシシッピ期
対象地域 北米（中西部：イリノイ州）
研究対象 考古学野外実習

1. はじめに

古い話で恐縮だが、1984年からアメリカのオレゴン大学 [University of Oregon] 人類学部に留学していた筆者は、1985年の夏にイリノイ州のキャンプスヴィルでノースウェスタン大学人類学部主催のサマー・フィールド・スクール (夏期考古学野外実習) に参加する機会を得た。このフィールド・スクールとは、人類学の場合、主に発掘を教える実習であり、これが異なる学部の場合は、海洋生物学・地質学・古生物学・植物学等、フィールドで実地を教える実習の意味である。フィールド・スクールでは無いが、筆者は同様な夏期実習を、1986年の夏にアメリカの首都ワシントンにあるジョージタウン大学医歯学部にて人体解剖学実習を受講したことがある (植崎、1988)。

アメリカの大学では、セメスター (2 学期制) [Semester]・トリメスター (3 学期制) [Trimester]・クォーター (4 学期制) [Quarter] という 3 つの制度に学期が別れている (植崎、1993)。通常、6月から8月の夏学期は日本の夏休みにあたる期間だが、多くの大学では夏期も開講している。アメリカの大学は、単位制度が整備されており、他大学に籍を置いていても大学間で単位の互換がきくため、他流試合ができるというメリットがある。

アメリカにおける人類学は、日本とは異なり、考古学・自然人類学・文化人類学・言語人類学の 4 つの分野を含めた総称である。従って、人類学部にはこの 4 つの分野の専門家が一緒に同居しているし、学生も同様にこれらを学ぶシステムになっている。一方、日本で人類学と言うと、一般的には自然人類学のみを表す。なお、アメリカの大学の人類学部が主催する発掘調査に学生が参加するためには、このフィールド・スクールの単位を取得していることが必須条件となっている。つまり、将来、人類学者や考古学者を目指す学生は必ず通過しなければならない関門ということになる。

ちなみに、アメリカには全体で470の人類研究部があり、そのうち369が大学に、66が博物館に、26が研究所に、そして9が政府に属しているというように、我が国とは比べようがないほど数多く存在している (植崎、1987)。その369の大学の人類学部のほとんどが、夏期考古学野外実習のコースを開講している。その中でも、当時、全米一という評判であったのが、ノースウェスタン大学の夏期考古学野外実習であった。

ノースウェスタン大学 [Northwestern University] は、イリノイ州シカゴ郊外の北部にあるエヴァンストンに1851年に創立されている私立の名門校で、日本でも有名なシカゴ大学よりも創立が古く、学生達はアメリカ中西部のハーヴァード大学と呼んでいる。フィールド・スクールは、イリノイ州の南にあり、イリノイ州のシカゴから車で約6時間、ミズーリ州のセント・ルイスの北約

100kmの位置にあるキャンプスヴィルという人口400人という小さな村にあるアメリカ考古学センターで行われた。ちなみに、筆者は、西海岸のオレゴン州ユージーンより自分の車でここまで移動した。



図1. イリノイ州の位置



図2. イリノイ州の主な遺跡と博物館

2. アメリカ考古学センター

[Center for American Archeology]

アメリカ考古学センターは、イリノイ川に面したイリノイ渓谷にあり、1968年に発見され1970年代に全米の注目を集めたコスター遺跡と共に拡張されてきた。このコスター遺跡は、ノースウェスタン大学教授のステュアート・ストリューヴァー博士 [Stuart STRUEVER] の指導の元に発掘され、1980年の調査終了までに約1万年前のアーケイック初期から紀元前1000年前まで26の文化層が発見され、遺跡は7m以上掘り下げられた (Struever & Holton, 1979)。ストリューヴァー博士は、フローテーションと呼ばれる、遺跡からの植物遺体を水洗により集める方法を導入した考古学者で、1960年代、民族考古学の提唱者のルイス・ビンフォード博士や現オレゴン大学人類学部名誉教授のメルヴィン・エイキンズ博士達と共に、ニュー・アーケオロジー (New Archeology) [新しい考古学] の先駆者として有名になった。ちなみに、こ



写真1. 学生が川でフローテーションを行っているところ

のニュー・アーケオロジーの先駆者達は、主に、シカゴ大学人類学部の教員や卒業生達であった。この、ニュー・アーケオロジーは、1950年代のアメリカが当時の旧ロシアから受けたスプートニク・ショックに伴い、科学を国策として奨励したことに端を発する。そして、その科学を1960年代に考古学に積極的に応用したことでアメリカの考古学は大きな変革を遂げたと言われる。センターは、村の39の建物を買取り、石器・土器・植物・地質・自然人類学・コンピューター研究室等を設置した。例えば、旧肉屋の建物は売店と博物館、旧銀行は自然人類学研究室というようになっている。このキャンパスビルから車で1時間以内の同心円部には約2,500の遺跡が存在するので、当分の間、発掘を続けることができるのである。センターでは、毎年夏、大学生のみならず小中高生や成人用にプログラムを組んでいて、1985年時点で15,000人以上もの人々が参加している。現在、活躍している考古学者や人類学者の中には、学生時代にこのプログラムに参加して以来、人類学者を目指した人も少なくないと言っているし、実際に、このプログラムを修了した後、現在、アメリカで人類学者として活躍している人々も多い。



写真2. 旧肉屋を改造した博物館

3. コースについて

ノースウェスタン大学のフィールド・スクールには、中学生・高校生・大学生が参加できるコースが用意されている。大学生用のフィールド・スクールには、5週間コースと9週間コースの2つがあり、筆者が参加した1985年時点の第18回ノースウェスタン大学考古学フィールド・スクールでは、前者が6月9日から7月13日まで、後者が6月9日から8月10日までとなっていた。ほとんどの学生は、9週間コースに参加しており、筆者も9週間コースに登録し参加した。学生は、ノースウェスタン大学を始め、コロンビア大学・シカゴ大学・イリノイ大学・インディアナ大学・ハワイ大学等から14名が参加し、これに対し講師陣は22名でその内9名が常時学生と一緒に発掘するという内容の濃いものであった。

毎日の日課は、朝5:30起床・6:00から朝食・6:30に宿舎をスクールバスで出発・7:30から15:30まで発掘実習・17:00から夕食・18:00から講義とかなりのハード・スケジュールであった。また、大学生コースに登録した学生は、自分でテーマを決めて独自の研究を期間内に行わなければならない、発掘が休みの土日にも研究室にこもって研究を行った。ちなみに、筆者は人骨の古病理学をテーマとして研究を行った。



写真3. 骨学実習を講義中のバイクストラ博士

これらのコースを統括するのは、当時、ノースウェスタン大学人類学部教授のジェーン・バイクストラ [Jane E. BUIKSTRA] 博士である。バイクストラ博士は、1945年にインディアナ州のエヴァンスヴィルに生まれ、デューポー大学にて人類学専攻で学士号取得後、シカゴ大学大学院にて人類学専攻で修士号及び博士号を取得している。ノースウェスタン大学では、博士号取得前の1970年から教鞭を取っており、1972年に助教授に昇進している。バイクストラ教授は、自らの専門を生物考古学 [Bioarchaeology] と呼び、長年、イリノイ州中西部で人骨を発掘しており、主に古病理学を研究している (Buikstra、1976・1981)。教授が筆者に語ったところによると、それは主に医師である父親に影響されたという。また、自分

で人骨の発掘を始めたのは考古学者により発掘された人骨が不十分な状態で発掘されているため、精密な研究をするには自分で始めるしかないと思い立ったためだそうである。これは、筆者もオレゴン州人類学博物館で出土人骨の整理をしている時に経験したことがあるが、1960年代以前に考古学者によって発掘された人骨は主に頭骨だけであり、四肢骨は多くの場合放棄されたか一部分しか保存されておらず、幼小児人骨はほとんどの場合骨片しか残されていない。教授は、1960年代後半より慎重な発掘を続け、すでに数百体にのぼる全身骨格の揃った人骨を収集している。その中には、約100体ほどのやはり全身骨格の揃った幼小児人骨も含まれている。この成果が認められてか、1985年には弱冠40歳にしてアメリカ自然人類学会会長に選出され1987年までその重責を果たした。女性の会長は、1930年の学会創立以来、前ワシントン大学解剖学教室名誉教授のトロッター博士 (M. Trotter: 1956年—1958年に第14代会長) と前コロラド大学人類学部のブルーズ博士 (A.M. Brues: 1972年—1974年に第22代会長) に次いで3番目である。

4. 骨学実習

骨学実習は、毎週、月曜日・水曜日・木曜日の夜、18:00—20:00に2時間ずつ行われた。骨学の試験は毎週行われたが、学生には親指の先ぐらいの人骨片が与えられ、30秒以内に、人骨か獣骨か・人骨であればその骨の名称・左右・特徴を当てさせるといったものであった。これは、英語を母国語としない筆者にはきついものであったが、何とかパスした。しかし、数年前までは、袋の中に入れた骨を手で触れるだけで人骨の名前を当てさせたそうであるから、現在はまだ簡単になった方であろう。ちなみに、筆者は日本ですでに人骨を扱う経験があったが、参加した学生の中には人骨を見るのも触るのも初めてという者もいた。しかし、数週間経ってコースが修了する頃には、その学生達もかなり人骨を同定する実力がついており、アメリカの優れた教育システムには驚嘆した。



写真4. 古病理学講義に使用された人骨1

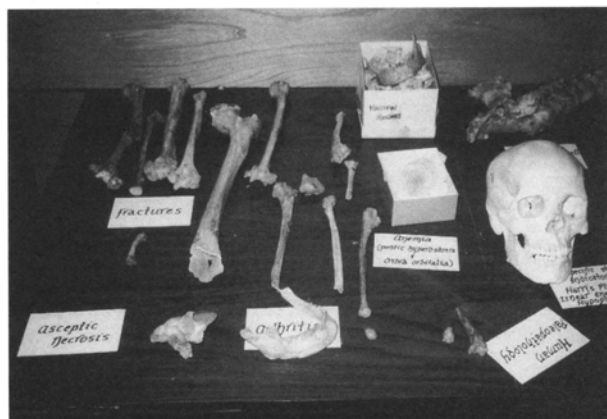


写真5. 古病理学講義に使用された人骨2

5. アメリカ中西部の編年

アメリカ中西部の編年は、研究者により意見が異なるが、アーケイック期・ウッドランド期・ミシッピ期の3期に大きく分かれる。

(1) アーケイック期 [8,000 B.C.—200 B.C.]

アーケイック期は、前期 (8,000 B.C.—6,000 B.C.)・中期 (6,000 B.C.—3,000 B.C.)・後期 (3,000 B.C.—200 B.C.) に大まかに分けられる。

このアーケイック期の内、前期までは大型動物の狩猟を行っていた。その後、大型動物の絶滅に伴い、その他のシカやアライグマ・リス等の小型動物及び水鳥を狩猟したり、魚や貝、堅果類・種子類・果実類を採集した。また、中期及び後期アーケイック期にはヒマワリ・アマランス・アカザ等の栽培を始めている。2,000 B.C.頃には、容器や食物の用途のために、ヒョウタンやカボチャの栽培も開始した。同じ頃、土器が出現する。



写真6. アーケイック期のジオラマ [イリノイ州立博物館]

(2) ウッドランド期 [200 B.C.—A.D. 1,000]

ウッドランド期は、前期・中期・後期に分けられる。この時期には、土器が普及し、埋葬用のマウンドが数多く築かれる。この内、100 B.C.—A.D. 300は、イリノイ州とオハイオ州には、ホープウェル文化が存在した。農業はまだ本格的には開始されておらず、サンプウィー



写真7. ウッドランド期のジオラマ [イリノイ州立博物館]

ド・アカザ・ヒッコリー等の採集が中心であった。

(3) ミシシッピ期 [A.D. 1,000—A.D.1,200]

ミシシッピ期には、農業が発達し、トウモロコシやマメが栽培される。また、巨大なマウンド群が築かれるが、ウッドランド期と異なるのは埋葬用のみではなく、神殿も築かれることである。この代表的なマウンドが、後で紹介するカホキア・マウンドである。



写真8. ミシシッピ期のジオラマ [イリノイ州立博物館]

6. エリザベス・マウンド群

エリザベス・マウンド群は、イリノイ川を望む小高い丘に位置し、その数は13からなる。マウンド群は、中期アーケイック期 (約6,000 B.C.) と中期ウッドランド期 (約150 B.C.~A.D. 400) の2期からなる。これ以外に、マウンドではない墓地も発見されている。

1985年のコースは、エリザベス・マウンド第7号を発掘調査した。この第7号は、エリザベス・マウンド群でも最大のものであり、1984年の発掘では、11の埋葬遺構から15体の人骨・28の土器・獣骨等が発見されている。1985年の発掘では、掘り残されている約4割を完掘し、中期ウッドランド期に属するこのマウンドの性格を解明することになった。

結局、1985年の発掘では、9体の人骨・5個の土器・獣骨・装飾品等が発見された。人骨の保存状態は驚くほ



写真9. エリザベス・マウンド第7号の遠景



写真10. エリザベス・マウンド第7号の発掘風景

ど良く、アルカリ性の黄土による保存度は、酸性土壌の日本の保存度とはかなり異なることを思い知らされた。面白い発見としては、真珠の首輪を伴ったイヌの骨があった。考古学センターの民族考古学者のホワイト博士によると、アメリカ・インディアンの民族例に身分の高い者が死ぬと白い毛のイヌと一緒に埋葬したという。また、そのイヌを殺す際には刃物を使用してはならず、必ず窒息死させたという。ホワイト博士の祖母には、アメリカ・インディアンの血筋が入っており、子供の頃にそ



写真11. 21号埋葬遺構の発掘風景



写真12. 21号埋葬遺構人骨出土状態



写真13. 22号埋葬遺構で出土した犬骨

の祖母から多くの民族事例を聞いたという。

7. 現地見学

発掘が休みの土日には、遺跡や博物館等の現地見学が行われることもあった。その中でも、イリノイ州立博物館・ディクソンマウンド博物館・カホキア遺跡を紹介する。

(1) イリノイ州立博物館 [Illinois State Museum]

イリノイ州のスプリングフィールドに位置する。人類学・動物学・地質学・植物学等の研究部門と常設展示を持つ、イリノイ州を代表する博物館である。入館料は無料である。この博物館には、前出のバクストラ教授監修による、アメリカ・インディアン等の等身大ジオラマが4つある。それらは、「アーケイック期」・「ウッドランド期」・「ミシシippi期」・「歴史時代」のもので、当時、アメリカでも話題になった素晴らしい出来である。余談だが、この展示を見た筆者はいずれこのような等身大ジオラマを製作することを夢見たのだが、この夢は1996年10月に開館した群馬県立自然史博物館の常設展示で「直立二足歩行」・「火の使用」・「埋葬」という人類進化のジオラマ3つを担当者として製作することで達成できた（植崎、1997ab・1999・2000）。



写真14. 歴史時代のジオラマ [イリノイ州立博物館]

(2) ディクソン・マウンド博物館 [Dickson Mounds Museum]

ディクソン・マウンド博物館は、イリノイ州のルイスタウンにある。1927年にドン・ディクソンとその父親トーマス・ディクソン等が農場で人骨や遺物を発見したことから発掘が開始され、発掘区に建物を作り、234体のアメリカ・インディアンの人骨を発見時のまま展示していた。当時は、アメリカ中から来館者が訪れ、その数は年間約4万人にも達したという。しかし、1940年頃には、年間約8,000人と往時の1/5にまで来館者数が落ち込んだ。そこで、経済的に困窮したディクソン親子は、1945年にこの施設をイリノイ州に売却し、親子はそのままイリノイ州に雇い入れられた。その後、1965年にはイリノイ州立博物館の分館として新しく開館した。博物館の名前は、ディクソン親子の偉業をたたえて、ディクソン・マウンド博物館となった。また、1972年には現在の建物が完成し、人骨を半永久的に保存しながら展示を行った。

しかし、1990年から1991年にかけて、アメリカ・インディアンによる人骨返還運動がアメリカ各地で盛んになり、1991年11月にはそのオープン展示を閉鎖することが決定された。その後、1992年4月3日に一般来館者への



写真15. かつてのディクソン・マウンド博物館の人骨展示
(現在は、この展示は非公開である)

公開は中止され、新しく展示をリニューアルするために1993年9月に閉館後、新しい展示は1994年9月より公開されている。このような人骨返還運動は、アメリカのみならず、オーストラリアのアボリジン・ニュージーランドのマオリ族・我が国のアイヌ等の例がある（植崎、1989）。ちなみに、我が国においては同様の試みが山口県の土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムにて弥生時代人骨を発見時のまま展示しているが、土井ヶ浜では人骨のレプリカが展示されている。

この貴重なディクソン・マウンド出土人骨についての詳細な記載は、考古学及び基本情報はアラン・ハーンによりまとめられており（HARN, 1971）、出土人骨の古病理学はダン・モースによりまとめられている（MORSE, 1978）。それらによると、出土人骨269個体の性別は、男性が78個体・女性が85個体・13歳以下の子供が75個体・胎児が31個体である。また、平均死亡年齢は、成人男性が42歳・成人女性が35.4歳である。13歳以上の子供を含めると、男性が29.7歳・女性が25.6歳となる。現代人と異なり、女性の死亡年齢が低いのは、出産に伴い若く死んだためと推定されている。平均身長は、男性で165.24 cm・女性で155.08 cmと推定されている。なお、このマウンドの年代は、主にミシシッピ期であり、A.D. 950年～1,200年の時代と A.D. 1,200年～1,400年の2期に分かれている。

(3) カホキア・マウンド [Cahokia Mound]

カホキア・マウンドは、イリノイ州ロリンズヴィルに位置し、ミズーリ州のセント・ルイスから東へ約13kmの位置にあるミシシッピ川とミズーリ川の合流点の氾濫原に位置する。ミシシッピ文化の遺跡中、最大の規模を持つマウンドである。時代は、A.D. 700年～A.D. 1,400年の約700年間続いており、最盛期はA.D. 1,100年～A.D. 1,200年の100年間と考えられている。マウンド群は、約120あるが、最大のものがモンクス・マウンドである。このモンクス・マウンドは、底辺が長さ330m・幅



写真16. カホキア・マウンド最大のモンクス・マウンド

216m・高さが33mもの規模を持ち、4段構造である。土台は、エジプトのピラミッドをもしのぐという。この土は、人工的に盛られたもので、その土量は61.5万m³と推定されている。頂上には、支配者である神官あるいは王が住んでいたと考えられている。

当時の人口は、トウモロコシ栽培の導入と共に、急激な人口増加があったと推定されている。この周辺の人口は、最盛期で25,500人と推定されている。なぜ、約700年続いた人口集中センターがその後、A.D. 1,400年に放棄されたかは未だに不明であるが、1,200年には気候変動があったことが確かめられており、その気候変動が引き金となって1,200頃から人口が減少し、1,400年に放棄されたのではないかという説がある。

このカホキア・マウンドは、1982年に世界遺産に登録されている。

8. その後のフィールド・スクール

筆者が参加した第18回ノースウェスタン大学フィールド・スクールは、その年、つまり1985年で18年間の歴史を閉じた。これは、バイクストラ教授が1986年にノースウェスタン大学から母校のシカゴ大学に移籍したためである。その後、教授はシカゴ大学に1995年まで在籍し、1995年からはニュー・メキシコ大学人類学部教授に就任して活躍しており、最近ではホンジュラスの遺跡を発掘調査している。教授の移籍に伴い、フィールド・スクールも、ノースウェスタン大学からシカゴ大学へ、またシカゴ大学からニュー・メキシコ大学へと変遷した。だが、フィールド・スクール自体はアメリカ考古学センターで継続して行われており、2002年は第35回ニュー・メキシ



写真17. 1985年のフィールド・スクール参加者の集合写真
(前列、中央が筆者)

コ大学人類学部主催のフィールド・スクールが行われる予定である。但し、期間は以前と異なり、5週間と9週間コースの選択性ではなく、全員が6/16～7/27の6週間コースに集約されたようである。

引用文献と参考文献

- ASCH, David 1976 "*The Middle Woodland Population of the Lower Illinois Valley*", Northwestern University
- BUIKSTRA, Jane 1976 "*Hopewell in the Lower Illinois Valley*", Northwestern University
- BUIKSTRA, Jane E. (ed.) 1981 "*Prehistoric Tuberculosis in the Americas*", Northwestern University
- ツェーラム, C.W. (寺田和夫・加藤泰建・松谷暁子訳) 1974 『最初のアメリカ人』、新潮社
- フェイガン, プライアン・M. (河合信和訳) 1990 『アメリカの起源』、どうぶつ社
- HARN, Alan D. 1980 "*The Prehistory of Dickson Mounds: The Dickson Excavation*", Illinois State Museum, No.35
- 河合信和 1982 「遺跡の宝庫は蒸気船時代の村」『科学朝日』、42(4): 130-133
- MORSE, Dan 1978 "*Ancient Disease in the Midwest*", Illinois State Museum, No.15
- 植崎修一郎 1987 「第55回アメリカ自然人類学会に参加して」『人類学雑誌』、95(3): 405-406.
- 植崎修一郎 1988 「米国の夏期集中解剖実習に参加して」『人類学雑誌』、96(4): 477-479.
- 植崎修一郎 1989 「アメリカ・インディアン出土人骨の再埋葬問題について」『人類学雑誌』、97(1): 147-148.
- 植崎修一郎 1993 「米英仏の大学と大学院」『太平洋学会誌』、(59・60): 39-60.
- 植崎修一郎 1997a 「D. 自然界におけるヒト」『群馬県立自然史博物館ガイドブック』、群馬県立自然史博物館 p.107-118.
- 植崎修一郎 1997b 「自然界におけるヒトのジオラマと絵」『Demeter (デメテル) 群馬県立自然史博物館だより』、(4): 2-3.
- 植崎修一郎 1999 「知っていますか展示の舞台裏: Dコーナー」『Demeter (デメテル) 群馬県立自然史博物館だより』、(12): 2-3.
- 植崎修一郎 2000 「D. 自然界におけるヒト」『群馬県立自然史博物館総合案内』、群馬県立自然史博物館 p.66-73.
- 大貫良夫 1995a 「カホキア」『世界の遺跡100』、朝日新聞社
- 大貫良夫 1995b 「第2章: アメリカ大陸の文化」『モンゴロイドの地球 5. 最初のアメリカ人』(大貫良夫編)、朝日新聞社 p.39-116.
- 斎藤成也 1992 「第2章: アメリカ大陸への人類の移動と拡散」『アメリカ大陸の自然誌 2. 最初のアメリカ人』(赤澤 威・阪口 豊・富田幸光・山本紀夫編)、岩波書店 p.57-103.
- STRUEVER, Stuart & HOLTON, Felicia A. 1979 "*KOSTER*", Anchor Press